

立西巻き

[校長先生つぶやき、つぶやく（校長だより）]



尼崎市立立花西小学校

2026.10.21（水）

No.23

どちらかというと「認める」かな

前号（22号）では、もうすぐ本番を迎える体育大会に向けて「お子様の頑張りに耳を傾け、認め、更なる力を引き出す声掛けをお願いします。」とお伝えしました。しかし、日々の忙しい子育ての中で「ほめる」「認める」というのは、言葉で言うほど、簡単ではありませんよね。

9月30日に発表されたベネッセコーポレーションの「ほめ方に関する調査」によると、多くの保護者がほめる際に次のような「3つの壁」を感じていることが報告されています。

1. 保護者がぶつかる「3つの壁」

- ① 目線の壁（71.7%）⇒ほめる前に、できていない点に目が向いてしまう。
- ② 言葉の壁（54.3%）⇒自分のほめ方が正しいのか自信がなく、ほめ言葉がマンネリ化してしまう。
- ③ 時間の壁⇒日々の忙しさから、頑張っている姿をじっくり見る余裕がない。

2. 子どもが本当に求めているほめ方

- ① 具体的な良かったところ（43%）⇒「ここがよかったね」と具体的に言ってほしい
- ② 頑張っている過程（42.5%）⇒結果だけでなく、「頑張っているところ」を見て欲しい
- ③ 結果の賞賛（26.7%）⇒「よくできたね」という結果だけの評価

この報告を読み、私自身も一瞬「ああ。わかる～。」とはなりましたが、何となく「ほめるとはなんぞや」と考えてみました。

「ほめる」ではなく「認める」の積み重ね

この調査結果を読み取ると、子どもたちが求めているのは、大げさな評価や結果の賞賛（ほめる）ではなく「自分のがんばりや変化に気付いてもらえている」という実感（認める）です。立派な結果をだした時だけに「ほめる」のは難しく

ても、ありのままの事実や過程を「認める」ことなら、日常のちょっとした場面でできそうです。

例えば、「今日も元気に学校へ行ったね」「最後まで諦めずに練習していたね」と事実を言葉にするだけで十分ですね。

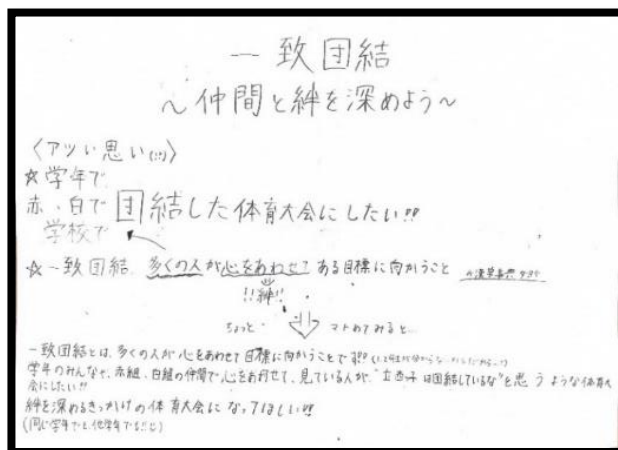
「自分を理解してもらえている」という安心感や存在への承認の連続が、自己肯定感を育み、自ら成長しようとする「非認知能力（生きる力）」の育成へと繋がっていきます。



笠井さん家の子育て↑

家庭事情や日々の忙しさはそれぞれです。無理に特別な褒め作戦を立てる必要はありません。「出来ている当たり前の事実を言葉にする」という等身大の承認を、ご家庭での愛情表現として大切にいただければよいです。もちろん、指導やしつけが必要な場面では毅然と対応しつつ、日常の「認める」機会を増やしていきましょう。

今年度の体育大会スローガン



一致団結 ～仲間と絆を深めよう～

児童会と体育委員会が中心となって考案した素晴らしいスローガンです。学校におきましても、一人ひとりの努力や成長の様子を丁寧に見つめ、しっかりと認め伸ばしていけるチャンスを生み出してまいります。子どもたち、保護者の皆様、そして教職員みんなで心をつにし、目線を同じくして、互いの頑張りを認め合いながら絆を深めていきましょう。一緒に子育てを楽しんでいきましょう！（*^-へ*）